



上／3歳クラスまで、親子でレッスンに参加。大好きなお母さんやお父さんと一緒に、子供たちものびのびとレッスンが受けられる。

右／レッスンはテンポよく進む。同年代の子供たちと一緒に行うことで、社会性や集団のルールを身につけ、心が育まれる。



英語のリズムを体得するためのオリジナル教材が使われている。

たくさんの英語の音やリズムにふれる

# 幼児期から育てたい 「英語を聞き取る耳」

2011年度から小学校高学年で必須化された英語。

始めるならば、早いほうがよりスムーズなほうというまでもない。

「えいご耳を育てる」を掲げるヤマハ英語教室に、幼児期からの英語習得の必要性を尋ねた。

日本語とは異なる  
英語のリズムを身につける

小学校5・6年で「外国語活動」として必須化された英語。その目的を新学習指導要綱では「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」こととしている。平たくいえば、文法の理解をともなう中学からの英語学習より先に、会話体験を通して英語感覚を身につけようというのである。

しかし、ここで疑問がわく。英語は「リズム語」と呼ばれるほど、強弱のはっきりした特有のリズムやイントネーションを持つている。ふだん話す日本語とはまったく異なるリズムを持つ英語を違和感なく身につけられるのだろうか。

ヤマハ英語教室企画課でカリキュラム開発を担当する田中舞さんはいう。「英語は、文の中に強く発音される部分と、そうでない部分が繰り返される特有のリズムを持っています。しかも、その強拍と強拍の間が、等間隔になるように発音されます」

例えば「Let's sing together.」という文では「Let's」と「together」のアクセント記号の個所を強く発音すると、正しい英語のリズムになるのだという。

乳幼児のころから親の声にげに反応し、それを真似ることで子供は言葉を覚えていく。しかし、一般には成長とともに、母語と異なるリズム、イントネーションをもつ言語は聞き取りにくいと



## 幼児期の「聞き取る」体験は将来の英語習得を容易にする

上智大学 外国語学部 英語学科教授  
和泉伸一 さん

英語の効果的な学習法は、年齢により変わってきます。おおむね中学1年くらいを境にして、その上の学齢では分析的に英語を学習する方法が効率的。対して、下の学齢では、まだ論理的に考えることが苦手なので、楽しみながら、自然に英語に触れていくやり方が有効です。

つまり、英語はやみくもに早く始めればよいというものではなく、発達に合わせたやり方が大切なのです。幼児期の子供は、知らない言語でもおもしろいと感じれば心に壁をつくることなく、どんどん吸収していきます。

言葉の習得の基本は豊かなインプット。いかに内容を伝える道具として言葉が使われているかに触れることで、自然と発話力(アウトプット)もついていきます。文脈のあるインプットにより多く触れることが、子供の言語世界を豊かにしていくのです。

英語を聞き取る力、ここで言うところの「えいご耳をつくる」ことは今、英語が話せるかどうかより、後々の英語習得を容易にする土台づくりになります。

### 音とリズムの体得が基礎 幼児期だから育つ「えいご耳」

全国展開しているヤマハ英語教室は、0歳児からのレッスンプログラムを持

を母語とし、あまり英語に触れる経験のないまま育った場合、英語をよく聞き取れない、うまく発音できないということが起こるのは、ごく自然なことだと理解できる。

感じるようになる。「英語のリズムを身につけることは、ナチュラルスピードの英語を聞き取れるようになるため、また通じる英語、伝わる英語を話せるようになるために、とても重要です」と田中さんはいふ。

となると、日本語

っている。しかし「単に早期教育を推奨しているわけではなく、その時にしか伸びない力を伸ばす『適期教育』をしているんです」と田中さん。「感覚的吸収力に優れている低年齢期に、たくさん正しい英語の音やリズムに触れることでそれらを体得させ、えいご耳を養うこと」がねらいだと説明する。

「感覚的吸収力」は、子供が五感をフルに働かせ、見聞きしたことをそのまま自然に身につけていく力という。言語の習得がまさしくそれに当たる。しかし、この感覚的吸収力は8歳を境に徐々に衰えていく。

「ですから、感覚的吸収力、すなわち音声リズムの習得能力に優れた低年齢期こそ、五感を通して、自然と英語に慣れ親しむのに適しているのです。しかも、この時期に身につけたことは一生忘れないといわれています」

同英語教室幼児コースの場合、レッスンの主軸となるのが「音とリズム」だ。

ヤマハユニスタイルトレッサ横浜で講師を務める坂田直子さん。ヤマハ英語教室は、子供の英語教育の指導方法をきちんと身につけた日本人講師がレッスンをを行う。



先にもふれたが、英語は「リズム語」といわれるほど、強弱のはつきりした特有のリズムを持つ言語。レッスンでは、オリジナルの歌やチャントなどを多彩な教材と併せて用い、

英語のリズムを体得させていく。

英語の強拍の部分に体の動きを合わせることで、英語の音リズムやイントネーションをテンポ良く、楽しみながら覚えられるように作られている。「英語を教え込むようなレッスンではありません。子供の成長・発達に応じた、無理なく言葉の習得ができるようにカリキュラムを組み立てています」と田中さんはいふ。

「この時期のお子さまは講師や保護者の真似をするのが大好きなんです」というのは、ヤマハユニスタイルトレッサ横浜で講師を務める坂田直子さん。「ヤマハ英語教室3歳児コースでは、オリジナルの歌やチャントで、英語のリズムに合わせて体を動かしたり歌ったりします。獲得したリズムは、大型絵本の読み聞かせを通して1人で話す経験につながるの、お子さまたちは興味をもって、楽しくレッスンに参加してくれます」といふ。

### 幼児期からたくさん英語にふれる それが無理のない習得の近道

同英語教室のレッスンはグループで行われる。幼稚園に通い始める同コースの子供は、興味のあること、楽しいこ

とについて少しづつ友達と会話できるようになり、友達からの刺激も受けやすい。

グループで英語を繰り返し使うなかで、英語を口にした他の子の様子を見て、自らも挑戦する子供も少なくない。レッスンを重ねるうちに、知らず知らず身に付いた英語表現が、口をついて飛び出すような場面も多い。

「そのときの英語の音やリズムがとてもしきれいなので、保護者の方がびっくりする機会も多いです」

英語は言語のひとつであり、そして言語はコミュニケーションのためにある。だからこそ「教える、習う」というスタイルではなく、レッスン内で経験した英語表現をいかに子供たちが自身が楽しんで講師や保護者、そしてお友達にアウトプットできる場を多く設けるかを意識し、レッスンに臨んでいる。

「聞いた言葉をまですそのまま口に出して真似してみることが、言語習得の基本的なプロセス。幼いうちからたくさん正しい英語の音とリズムに触れ、自然と英語を身につけていくことが大切です」といふ。

英語体験は、できるだけ低年齢から。それは文部科学省も意識している。同省は、今年度から専門家会議を設け、小学校低学年から英語を必修にする検討を始めている。

より早い時期からの英語体験が求められるようになった今、幼児期から英語が聞き取れる耳を育てるヤマハ英語教室のレッスンは注目に値する。

動画をチェック!

ヤマハ えいご耳

検索

◆お問い合わせ先 株式会社ヤマハミュージックジャパン

お近くの教室検索・体験レッスンのお申し込みはHPで!

<http://www.yamaha.co.jp/school/>